

# 図書館情報学での人種の不可視性

## —皮膚の色による差別につまずく—

トッド・ホンマ 著  
川崎良孝・福井佑介 訳

---

### 1 皮膚の色の脱落：序

私たちは書かれた歴史のパリンプセストに直面しなくてはならない。書かれた歴史は消し去られ、否定される。そして過去を新たに作るのだが、そうした歴史は人種の調和と多元主義という現在の展望をまことしやかなものにしている。— bell hooks (1997)

20世紀の初頭、W. E. B. デュボイス (1903) は「20世紀の問題とは皮膚の色による差別の問題である」(p.xi [p.5]) と書いた。1世紀を経て合衆国における人種関係はこれまでと同じほど重大な問題であり続けている<sup>(1)</sup>。レオン・リトワック (1999) は、「21世紀の問題は依然として皮膚の色による差別の問題で、人種の平等を求める闘いは続くだろう。しかし以前とはまったく異なるアメリカ (黒人やラティーノが3分の1を占めるアメリカ) で、また非白人が絶対的多数を示す世界で、決着がつくまで争われるであろう」(p.1) と記した。多くの学問分野では人種に依拠する学術研究に長い歴史があり、また合衆国の図書館利用者は一貫して多様化している。そうではあるものの、図書館情報学の分野は人種についての進行中の論議や議論から遅れをとっている。その代わりに人種ブラインドネス (race blindness) という真空の中で作用していると同時に、

---

Todd Honma, “Trippin’ Over the Color Line: The Invisibility of Race in Library and Information Studies,” *InterActions: UCLA Journal of Education and Information Studies*, vol.1, no.2, 2005, Article 2 (p.1-26). Permission to publish this Japanese edition was made by Todd Honma.

著者 トッド・ホンマ

訳者 川崎良孝 (京都大学名誉教授)

福井佑介 (京都大学大学院教育学研究科)

人種ブラインドネスが具体化している醜い意味を認識できないでいる。ローナ・ピーターソン (1996) はこの点について説得力のある主張をしている。すなわち「人種や人種主義という領域での図書館情報学分野の学術研究はあるのだが、そうした研究はこの領域の研究に値する真剣な考察がされていない」(p.172) ということである。図書館情報学分野の研究者や学生は、こうした意見を幾度となく表明してきた。それでも図書館情報学の分野では、人種問題をめぐる持続的な批判的論議が心配になるほどに欠如している。学術研究におけるこうした欠陥に対抗するには、次のような問いを提起する必要がある。どうして研究者や学生は人種と図書館情報学の諸問題について、率直かつ真摯に話し合わないのか。なぜ図書館情報学の分野は人種や人種主義の議論の周辺を忍び足で歩む傾向にあるのか。また人種や人種主義の代わりに「多文化主義」や「多様性」といった言葉を用いて、言説を制限するのか。図書館情報学の分野は明らかにホワイトなのに、だれもホワイトネスや白人特権について話そうとしない理由は何なのか。本稿はこのような問いを意識して、図書館情報学分野における皮膚の色の脱落、およびホワイトネスの温存について批判的考察を行う。

人種と図書館情報学にまつわる論議を進めるために、図書館情報学の正統とされる思考を批評するには、まず主流となるイデオロギーへの挑戦から開始しなくてはならない。主流となるイデオロギーは、「人種」という主題を図書館についての客観的で科学的な探求という領域の外に置いてきた。マイケル・ハリス (1986) はこの実証主義的パラダイムを脱構築し、「図書館学の研究活動を取りまく、認識論的かつ規範的な論点についての議論」(p.522 [p.27]) を奨励した。このようなハリスの批評は、図書館や図書館情報学を構築してきた土台となる偏見を理解するために必要であるし、また図書館や図書館情報学の人種化された編成を隠蔽するために作用している従来の概念化を避けるためにも必要である。本稿が取り上げるのはハリスが提起した2つの課題である——すなわち図書館学の認識論的な土台の検討、および図書館情報学の規範性への挑戦で、後者を具体的に述べると白人の人種的規範性への挑戦である。図書館情報学分野の文献を統合すること、それにエスニック・アメリカ研究、女性研究、クイア研究といった他分野からのさまざまな理論的視座を組み込むことによって、本稿は図書館情報学の人種に関わる言説に多数の視座からの批評を提示する。そうした批評は周縁化されているグループの見解を含み、またさまざまな形態の特権や抑圧についての複雑性や相互交差性を認識する。本稿はハリスの主張する図書館情報学へのいっそう「全体論的な」アプローチに答えるものである。ハリスは次のように述べている。図書館学は「独立した1つの学問分野ではなくむしろ、他の全ての学問分野から引き出された知識を媒介する役割を果たす専門職領域であり、この領域における研究者は図書館に関する特定の問題を解決するのに貢献する可能性のある社会科学全般の発展をいつでも取り入れることができるよ

う敏感でいなければならない」(p.523 [p.29])。ハリスの批評に依拠して以下の指摘をすべきである。これらの問題は文書館をはじめとする情報機関やそこでの実践にも存在し続けているが、筆者の分析は特に図書館の領域の問題に限定している。

大多数の場合、図書館は一般住民に情報への普遍的なアクセスを提供する平等主義(egalitarian)の機関と把握されている。とはいえそのような架空の博愛的な理想主義的展望は、社会全体にみられる人種差別的な社会構造の再生産や温存に関わる図書館の感受性を都合よく繕いがちである。公立図書館という機関を人種化の歴史の中で文脈化し、また今日のリベラル多文化主義理論の動向の中で文脈化することによって、多分にデイヴィッド・ローディガーやジョージ・リップシツとといった批判的なホワイトネス研究者の業績に沿った記述を試みることになる。ローディガーは「持続する抑圧を理解する鍵、新しい出発の可能性の鍵として、ホワイト・アイデンティティの歴史とそうしたアイデンティティの出現に焦点を据えて」(Roediger, 2002, p.16) いる。ローディガーと同じように、筆者は過去／現在についての拘子定規な線型的な扱いを避ける。それは「『用いることができる現在』を明らかにするためであり、そのことによって今日の人種主義に反対できるようになるし、また過去に関する従来と異なるいっそう適切な問いを提出できるようになる」(p.16) からである。これらの研究者が提示するように、合衆国社会における人種と人種主義は社会歴史的に構築されたものである。そして私たちが合衆国の人種関係の現状を理解する力量は、これらの社会的諸力を検討する能力に左右される。

こうした目的を意識しつつ、本稿の最初の部分では、もっぱら合衆国の公立図書館の基盤、および図書館情報学の分野が公立図書館を分析対象として取り上げてきた方法を探る。ウェイン・ウィーガンド(1999)が指摘するように、「アメリカ図書館史について深い理解がなければ現状を十分に評価できないし、図書館の将来を慎重に計画することもできない」(p.2 [p.4])。次いで「多様性」と「多文化主義」についての現在の言説に注目する。そして図書館情報学の分野で人種に関する矛盾を十分に表明できていないことを批評する。最後に、過去から受け継いできた非常に曖昧な人種(人種化)に関する学術研究について論じる。それは認識論での排除を検討することによるが、そうした排除が人種や人種主義の問題を図書館情報学の中にいっそう完全な形で統合することを妨げているのである。本稿はこのような分析を通じて、代わりとなる軌道を確認する。そうした軌道は図書館情報学に新しい方向づけを示し、究極的には図書館情報学分野の社会的責任や説明責任を高める方向に導く道である。図書館情報学は人種に関する言説について長期の体系的な批評を絶対必要としている。

## 2 図書館の存在論とホワイトネスの構築

ホワイト・エスニシティを無視することは、それを自然に取り入れることによって、ホワイト・エスニシティのヘゲモニーを倍加させる。

— Coco Fusco (1988)

ジョン・バッド (1995) は、「図書館の存在論的な目的——存在の本質——についての理解がなければ、組織としての図書館の機能に関する経験主義の研究は土台となる文脈を欠いている」(p.306)と主張している。そして図書館の存在論を「図書館存在の中核、図書館の存在理由……」と定義づけ、「図書館の存在論の中核として、図書館は情報の収集、組織化、アクセス提供のために存在する」(p.306)とした。バッドは図書館情報学の研究にとって図書館の存在論的な目的の理解が不可欠としたが、この指摘は正しい。しかしながら不変の歴史横断的機関として図書館を扱っており、この点はとりわけ近視眼的である。すなわち図書館の「存在論」を、あたかもイデオロギーや社会政治的な配置や一時性から独立したものとして扱っている。換言すると、バッドは「図書館存在の中核」(p.306)について狭い見解を提示し、大きなマクロレベルの分析の探求よりも、文脈から切り離されたマイクロレベルの現象に焦点を当てたのである。マクロレベルの分析は、図書館および図書館が機能する具体的な社会政治的な環境について、いっそう複雑な理解を生むだろう。シューリッヒとヤング (1997) は次のように主張している。存在論は「歴史や社会学の外にあるのではない。存在論は個々の文明の社会史の内側、そうした文明の個々のグループの内側に深く編み込まれている」(pp.7-8)。バッドのような研究者の近視眼的な見方は、図書館システムの中立性と思われているものを温存し、図書館がいかにして他の社会的諸力によってイデオロギーで構成され、いかにして歴史に埋め込まれた人種プロジェクトに関与してきたかを認識できないようにしている。

公立図書館に関する歴史的記述は祝賀の記述になりがちである。そうした記述は公立図書館に包み込まれた平等主義 (egalitarian) という精神、および公共圏における公立図書館の使命を盛んに売り込む。ルービン (2000) は公立図書館の歴史的な使命を次のように要約している。「(1)社会における教育や社会化のニーズを支える、(2)広範な市民の情報ニーズを満たす、(3)自己教育を促進する、(4)住民の一般的な好みを充足する」(p.244)。しかしながら過去20年間に、いっそう批判的な学術研究が発達し、公立図書館についての旧来の図書館像に疑いを投げかけている。ハリスなどの研究者は、公立図書館成立に関する賞賛されている神話を払い去って、脱構築を行った。そして代わりに、図書館および図書館員を「権威と社会的統制の担い手」(Rubin, 2000, p.235)との再解釈を下した。図書館とりわけ合衆国の公立図書館の社会政治史を検討することで、人

種のかつ人種差別的なものとしての図書館の編成——存在論と言えるかもしれない——について、いっそうすぐれた理解が可能となる。

一般住民の善に資する民主化の機関としての公立図書館は、どのようにして図書館の使命とされるものを支持し、また同時に使命と矛盾をきたしてきたのであろうか。この点の慎重な検討は、合衆国での人種編成プロセスにおける図書館特有の役割を明らかにすることになる。オミとウィナント（1994）が的確に主張するように、人種の編成は「歴史に埋め込まれたプロジェクトのプロセスで、このプロジェクトの中で人間の身体と社会構造が表明され組織される。……人種の編成は、社会が組織され支配されるヘゲモニーの進化と〔結びついている：原文〕」（p.56）。意図的か否かを問わず、常に図書館は明確に人種的な動機を有していた。しかし図書館の歴史研究者、実務者、理論家は、決してそうした動機を調べようとはしなかった。オミとウィナント（1994）は、さらに以下のように説明している。

人種プロジェクトは、人種のダイナミクスの解釈、表明、説明であると同時に、特定の人種に沿って資源の再組織と再配分を行う取り組みでもある。人種プロジェクトは、特定の言説実践において人種が意味するものと、その意味を土台にして社会構造と日常経験が人種によって組織化される方法とをつなげている（p.56）。

図書館情報学に関して、図書館は歴史的に白人の人種プロジェクトの利益に仕えてきた。それは白人アメリカ市民の構築と維持を助けること、および図書館情報学という分野の構造自体に白人特権の温存を助けることによる。合衆国の図書館の起源と発展の枠組みを再構成することによって、どのようにして図書館が「人種に関わる政策と実践の発展と制度化のプロセス、〔および：原文〕人種の意味の統合と社会化に」（Winant, 2001, p.101）共謀してきたかを理解できる。同時にそれらは、現在の図書館情報学分野に継続的につきまとっている白人の人種特権に寄与している。

論を進める前に、ホワイトネスの概念を少し説明するのがよいだろう。サン・ジュアン（San Juan, 1998）によると、ホワイトネスというのは「『植民者社会』としての国民国家である合衆国の編成史に符合するもので、ヘゲモニーの集合体としてのさまざまなヨーロッパ民族からなる社会政治的な構成体」（p.162）<sup>(2)</sup>をいう。同じようにフランケンバーグ（2001）はホワイトネスについて8点の定義を概説しているが、そこではそうした定義の多様性と意味の移動性を指摘している。フランケンバーグの定義の一部分は次のようである。「ホワイトネスとは人種支配で構造づけられた社会の中で、構造的に有利な位置をいう。……〔さらにホワイトネスは：原文〕歴史の産物である。……ホワイトネスの意味は複雑に重層化され、地域および地域を越えて変化しやすい……と同時に、適応性があり制御しがたい」（p.76）。ジョージ・リブシッツ（1998）によると、社会文化的カテゴリとしてのホワイトネスは、富、権力、機会の不平等な配分を支持す

る方式で、常に創出、再創出されるということである。さらにリプシッツは、「ホワイトネスは無標のカテゴリで、このカテゴリによって差異が構築される。しかしホワイトネスは決して自分の名前を話す必要はないし、社会的関係や文化的関係の組織原理としての役割を認める必要もない」(p.1)と続けている。これらの研究者が示すように、「ホワイトネス」は特権についての不可視で捕らえどころのない構造として作用する。それがために、白人支配階級の利益を保護するために、常に更新や再統合が可能となる。ホワイトネスの不可視性と規範性がもたらす結果と闘うためには、ホワイトネスとその構造原理を識別することが必要となる。そのため合衆国の公立図書館システムの基盤と発展を考察するとわかるように、ホワイトネスの歴史に関する理論的探究に乗り出すことが図書館情報学分野に不可欠となる。

合衆国における最初の主たる公立図書館の設立には、当時の社会や政治の諸力が大きく影響していた。そうした諸力の中には、合衆国の都市化、いっそう知識ある市民を育成するための公共サービスや社会機関の増加、合衆国への大量の移民流入、とりわけ東欧や南欧からの移民流入があった(Rubin, 2000, p.232-234)。ハリス(1973)は、19世紀の移民のパターンが公立図書館の設立と使命を刺激する契機になったと指摘している。ハリスによるとボストン公立図書館設立の指導者ジョージ・ティクナーは、『民衆の同化』および『民衆を自分たちの制度に率先して服従』させることが、喫緊に必要であると考えていた(p.2510)ということである。さらにハリスの指摘によれば、「[公立図書館の]思想は人びとが自力で——道徳的、知的に——上昇するようにさせることにあった」(p.2511)と記している。これらの設立原理は白人による民族の同化と実力主義の促進という合衆国で一般的なヘゲモニーのレトリックを示している。同化と実力主義はいずれも社会学者が強く批評してきたものである。そうした研究者はとりわけ平等主義(egalitarian)の合衆国社会という虚偽の理想を批評してきた。この社会は人種を土台とするイデオロギー上の差別、実体としての差別を見逃すのである。例えばオミとウィナント(1994)は合衆国の社会学的思想の歴史の中で同化モデルを構造化し、非白人の経験を説明できない点を批評した。オミやウィナントが説明するように、同化主義者の理論は非白人の民族グループを主流となる(白人の)合衆国社会の範疇に組み込むことを予測する試みであった。そしてこの理論は不十分なことが証明されてきた。というのは「ヨーロッパの(白人)エスニシティの枠組みを堅固な土台としており、人種での不平等が民族での不平等と大きく異なることを把握できなかった」(p.16)からである。換言すれば、同化主義者の取り組みは、グループを合衆国の支配的で集合的な人種アイデンティティに変形させるにあたって、そのグループの能力(無能力)の決定に皮膚の色が果たす重要性を認識できなかったということである。公立図書館の移民同化プログラムは、これらと同じ人種プロセスを温存するという共謀的な役割を果たして

きた。したがって公立図書館システムの発足当初から、公立図書館システムは人種化プロジェクトに関与し、その目的はヨーロッパの民族にホワイトネスを植えつけることにあった。

図書館情報学の多くの業績が、移民や民族グループを合衆国の主流社会に同化する図書館の役割を検討している (e.g. Jones, 1999 ; Nauratil, 1985, Harris, 1973)。しかしこれらの業績は、白人の人種化された市民の形成に果たした図書館の役割を説明してはいない。例えば合衆国の図書館史における同化主義者の叙述が特に優遇したのは、図書館がアメリカ化プロジェクトを採択した記録を留めることであった。プラマー・アルストン・ジョーンズ・ジュニア (1999) は次のように記している。「アメリカ化という概念は、この概念が運動に結びつく以前の時期であってさえ、多くの人に多くの意味を含む語であった。しかし図書館員にとっては、この語は単に2つの部分で構成されるプロセスを意味していた。すなわち英語の教育と市民権への準備である」(p.10)。さらにジョーンズは、「アメリカ化がアメリカ公立図書館の適切な使命か否かについて、図書館員は活字で問題にしたり論議したりすることはなかった。アメリカ化は移民への図書館サービスのまさに目標自体であった」(p.10) と続けている。ジョーンズはアメリカ化のプロセスにおけるホワイトネスの役割を認識していた (ジョーンズはホワイトネスを「アングロ・コンフォーミティ」として言及している) が、ジョーンズの論議は記述のレベルに留まっている。ジョーンズは図書館において社会構造として浸透しているホワイトネスの意味、そして図書館の利用者と職員の双方に派生的に生じるイデオロギー上の問題を検討していない。それがために、ジョーンズは白人という人種カテゴリを自然なものとして把握し、そうした人種カテゴリが国民国家である合衆国の人種ヒエラルキーを擁護するために、まさに構築されたものであり、擁護する責任を負っているということを詳しく説明することはなかった。

ジョーンズなどの図書館史研究者の業績は、とりわけ権力の言説としてのホワイトネスを見過ごしたのだが、その見過ごし方は極めて教育的である。こうした業績に表明されているホワイトネス自体の不可視性が、白人の規範性の更新に仕え、合衆国の有色人種に向けられている実体上およびイデオロギー上の差別の検討を看過させているからである。フランケンバーグ (2001) は次のように書いている。

「ホワイトネスの不可視性」という句は、1つにはホワイトネスが自分自身の名前を話さない時にあてはまる。すでに指摘したように、そうした時にホワイトネスは単に自分の規範性を当然のことと決めてかかる。さらに「ホワイトネスの不可視性」という句は、規範性の中立性がある種のホワイトネスを主張する時にあてはまる。その場合、ホワイトネスは同時に、かつ頻繁に国民性 (nationality) と結びついている (p.81)。

この意味でのアメリカ化を合衆国の図書館システムは促進したのだが、それはホワイト化のプロセスを示している。このプロセスによって、ヨーロッパの民族は皮膚の色に依拠して特定の民族移動可能性を有した。そのことによって白人の人種アイデンティティに入ることが許されたのである。

ジョーンズの分析に欠点はあるものの、ジョーンズが詳述した総合化は、人種と市民権について歴史に埋め込まれた相互関連システムに証拠を示した点で特段の洞察を示している。「民主化」という公立図書館の使命を唱道することによって、これらのアメリカ化プログラムは、合衆国の市民権を獲得できるグループだけに奉仕した。有色人種の市民権を意図的に排除すること——原住アメリカ人とチカノの征服と植民化、アフリカ系の人びとの奴隷化、「市民権を獲得できない外国人」として法規定されたアジア人移民労働者の輸入といった人種差別の歴史に収斂する——は、非常に異なる種類の歴史叙述になるし、合衆国の市民権プロジェクト全般、また個別적으로는図書館のアメリカ化プログラムの人種的性格を明るみに出す。言葉を換えて言えば、図書館はこの種の白人の人種社会化プロセスを促進することで、皮膚の色を容易には隠せない人、図書館システムが促進する白人の人種市民に同化できない人に向けて、人種的な排除と抑圧に関わる必然的なシステムの温存という罪を負ってきた。

もし市民権という概念が特定の人種プロジェクトの温存と密接に結びついているならば、「モデル市民」の育成を自負する図書館システムについて、どのようにすればそうした図書館システムを十分に定義づけ説明することができるのであろうか。換言すれば、白人の人種市民の維持に専念する排他的な場としての図書館を検討することによって、こうした階層の人種国家を踏み越える可能性はどのようなものなのだろうか。歴史を第2次世界大戦に進めると、例えばハリス、ハナ、ハリス（1998）は、公立図書館の発展にたいする大戦の影響、合衆国の図書館の理想への新たな責任感にたいする大戦の影響を探っている。ヒトラーとムッソリーニの独裁下で生じた歴史的な焚書と図書館への抑圧の結果として、ハリスは1939年の「図書館の権利宣言」の採択を詳述している。

いまや図書館は「民主的文化の武器庫」として描かれた。図書館員は単に中立的で受け身的な導管にすぎず、この導管を通じて日々の情報が民主的共和国の啓発された市民に伝達されよう。この思想は人間の知識の全諸相へのアクセスを提供することによって、民主的プロセスを容易にするということであった。そうした知識がいかに瑣末であっても、またいかに論争的であっても、生じうる結果を考慮することはない。どの情報を使うのか、どのように情報を用いるのかの決定は、読者の専決事項であった（p.28）。

とはいうものの合衆国の全史が示すように、「民主主義」や「市民権」といった思想は論争的な語であった（現在も論争的な語である）し、これらの語には懸念と不信が投



じられてきた。特に合衆国で周縁に置かれている人や抑圧されている人にとってはそうである。上述のような包括的に擁護される「ヒューマニズム」は、「アメリカの例外主義という公表された民主主義」を促進する傾向があるとともに、「公共圏に入ることによって約束され要求される市民権、普遍的に思われる抽象的な市民権を達成できる身体に関して、明らかに排他的な前提に依存している」(Wiegman, 1997, p.6)。「民主主義」や「中立性」といった語で図書館を枠づけることは、人種の排除という隠された構造的形態を隠蔽する。この構造的形態は白人の人種利益を保護するシステムで、リップシッツが的確に名付けたように「ホワイトネスへの執拗な投資」(1998, p.216-217)である。リップシッツは図書館員の人種化された展開に簡潔かつ深い洞察で触れている。それはルーズヴェルトのニューディールの下で採択された一連の立法で、それらは有色人種よりも白人に特権を持たせていたという。リップシッツの分析は隠され制度化された人種差別の形態を認識する新しい人種ポリティクスに踏み込んでいる。リップシッツは次のように書いている。「合衆国の人種主義は、直接的、明示的、公然とした排除の実践で進められる場合がある。しかしいっそう多くの場合は、間接的、推論的、暗黙の政策で実施され、そうした政策は人種化された結果への責任を逃れるために、公然とした人種差別の意図を否定するために用いられる」(p.216)。

有色人種の声聞くことによって、図書館分野でのホワイトネスの作用の仕方について理解を深めることができるだろう。ルービン(2000)はハローが実施した公立図書館に関するラティエーノの認知に関する調査を引用している。そして「しばしば図書館はアングロ系がアングロ系に奉仕するために構想され統制されている多くのアングロ系の機関の1つと考えている」(p.241)と指摘している。この言及は主流となる学協会や実務者が唱道していると思われる図書館像、すなわち平等主義や人種ブラインドという像とは矛盾する。もし図書館および図書館情報学分野の全般について、人種化を十分に理解しようとするなら、こうした視座や白人の位置の検討が、図書館情報学分野でさらに探究される必要がある。

このことは、白人の機関としての図書館の人種化が、有色人種コミュニティの変化や自立の可能性を完全に弱体化させていると述べているのではない。有色人種コミュニティにおける図書館の役割に焦点を当てる図書館史研究者は、図書館が提供すべき変容の可能性を示してきた。例えばドゥモン(1986)は黒人を対象とする隔離された図書館を例示し、「これらの独立した黒人図書館は別途の行政単位で、当該自治体の他の公立図書館システムとは何らの公式な結びつきもなかった」(p.489)と記している。私的な黒人図書館と公的な白人図書館という2分法の関係は、公立図書館における排他的な実践を示す証拠となる。さらにこうした実践は2つの型の図書館の人種化が、正反対の人種化であることを明るみに出している。それは人種に関する支配的な言説を直接的に反映

しているし、しばしば黒人／白人という2分法（問題なことに他の人種グループを置き去りにする）の枠組みを持つ。図書館分野でのホワイト化の実践への抵抗や実践からの逸脱が生じた特定の時期がある。しかし本稿の目的からして、このような特定の時期に焦点を当てるのではなく、図書館とホワイトネスに集中する。それは図書館情報学分野において、制度や実践に現れる白人の人種ヘゲモニーについて、そのイデオロギー上の編成や実体としての結果を明るみに出したいからである。

図書館の存在論や起源の検討は人種プロジェクトでの共謀性を説明しなくてはならない。基本的に人種差別的な機関として図書館を把握するのは意気消沈させられるが、そうした意気消沈する把握が必ずしも将来の図書館実践の軌道を支配するわけではない。サン・ジュアン（2002）は次のように書いている。「起源が将来の動きの方向を予測する場合もあるが、起源が目的地をあらかじめ決定する必要はない」（p.35）。実のところ、ホワイト化された図書館情報学分野に向けての動きは、いくつかの点で図書館の存在論的起源によって予測されていた<sup>(3)</sup>。こうした社会歴史的なプロセスのイデオロギー上の基盤を検討することで、また時代遅れの黒人／白人という2分法を越えて分析するために図書館情報学分野での有色人種の異なる経験や視座を検討することで、図書館情報学分野にみられる隠された特権や公然たる特権に関して、いっそう開かれた批判的対話を行うスペースを加えることができる<sup>(4)</sup>。エスピナル（2001）が指摘するように、「ホワイトネスを扱わない限り、またホワイトネスを識別して命名しない限り、私たち図書館員集団を苦しめている多くの問題、また有色人種の個々の図書館員として苦しめられている多くの問題は続くだろう」（p.133）。

### 3 多文化主義の介入：政治から自助努力へ

私は文化の政治的性格を認めない多文化主義は、人種差別、性差別、同性愛恐怖、それに経済的に搾取する機関の分解に向かわないと確信している。— Angela Davis（1996）

図書館情報学の分野は決してホワイトネスの概念を明示的に扱わないものの、最近になって多様性や多文化主義といった概念が流行語になり、促進されて、アクセサリーになっている。多様性や多文化主義についてのレトリックは、異なりはするが好意的な2つの方向に向かう傾向にある。すなわち、「まさか。多様性が十分ではない」と痛ましいとする方向か、あるいは「新たな発見の多文化主義を祝おう」とする賞賛の方向である。例えば図書館情報学の多くの文献は、図書館利用者は言うまでもなく、図書館の専門職や学協会における民族や人種での多様性欠如を指摘し、愕然としている（e.g.,

Reese and Hawkings, 1999 : de la Pena McCook, 2000)。こうした非難じみた姿に反応して、多様性に関する図書館情報学の研究は、多くの事例研究、調査報告、それに図書館専門職員による「あなたの図書館で」(@ your library) の多様性経営法に関する記述的業績を排出してきた<sup>(5)</sup>。皮肉なことだが、図書館情報学におけるいわゆる多文化の動向にも関わらず、「多様性」を必要とする正確な理由については、何らの深い検討もされていない。

アメリカ図書館協会のいくつかの主要な多様性プロジェクトを垣間みると、この分野が人種に関する批判的言説を欠いていることが浮かび上がる。例えばアメリカ図書館協会の多様性部は多様性が必要な理由を次のように説明している。図書館利用者は、「[図書館の：原文] 展示、蔵書、ウェブサイト、職員に自分たち自身を見る必要がある。自分自身を見るのは人間の最初のつながりであり、生涯を通じての図書館利用者になるための最初の人間としての招待である。自分自身を見ることで、あなたは見知らぬ人ではなく、友人になる」(*Recruitment*, 2004)。民族資料情報交換ラウンドテーブル (EMIERT) は、同ラウンドテーブルの主目的を「推奨された民族蔵書、サービス、プログラムに関する情報源として奉仕すること」と明示し、その根拠として「コミュニティ全体に奉仕する図書館員は多くの民族グループの人にサービスをする」を挙げている (*A short history*, 2002)<sup>(6)</sup>。こうした簡略な紹介文だけをみても、アメリカ図書館協会が多文化主義にサービス志向のアプローチを用いる傾向にあり、人種および人種主義の問題について批判的視座を欠いているのが明確となる。そのため指摘されるべきは、この種の多文化／多民族レトリックにおける二重の脱落が、どのように作用しているのかということである。まず「多様性」や「エスニシティ」といった概念の重視は人種へのいかなる言及も無視する。そして問題なのだが、「多様性」、「エスニシティ」といった語を人種化された意味を有する明確な権力関係から切り離してしまう。次に特定の人種を示さないことで、社会的、制度的な差別構造の概念化や明示ができなくなる。こうした差別構造が、まず特別な委員会設置の必要性に向かわせるのである。1960年代は重大な分岐点であったが、次章ではそれ以後の大きな社会史の文脈で、図書館の「民族」サービスの歴史的発展を考察する。そのことによって、図書館情報学に染み込み、人種に関する意味ある議論を禁じている新保守主義の軌道を解明する。

1960年代と1970年代は合衆国や世界を変容させた時代であった。合衆国の「人種的マイノリティ」グループが公民権運動や文化ナショナリズム運動を通して、自分たち自身の権利や自己決定権の要求を開始しただけでなく、アフリカ、アジア、ラテン・アメリカでも脱植民地化運動が実質化されていった。人種抑圧への焦点化、社会に浸透している白人による人種差別構造の変化を求める願いが、合衆国のあらゆる社会に浸透していた。図書館も例外ではなかった。ルービン (2000) は次のように書いている。

アフリカ系アメリカ人とヒスパニックが公立図書館の使命に等しく含まれていることの保証について、1960年代の公民権運動は決定的な転換点であった。以前の公立図書館運動は、主として民族文化をアメリカの主流文化に同化することに焦点を当てていた。1960年代の公民権運動は民族の自己決定権を求める闘いであった (Stern, 1991)。アフリカ系アメリカ人やヒスパニックといったグループは必ずしも同化を願っておらず、むしろアメリカ社会が授けなければならなかった利点への平等な機会と権利を主張した。メルティング・ポットという概念は、多文化社会という概念に置き換えられた (p.242)。

民族や人種にまつわる図書館サービスは、反人種差別プロジェクトとして解釈できる。すなわち白人の規範性や白人の人種特権と闘い、図書館情報学での人種に依拠する矛盾に注意を喚起した。ノーラティル (1985) が指摘するように、「社会意識が高い図書館員は、もしコミュニティでの社会経済的位置が不正義の結果であれば、図書館はそうした不正義との闘いに参加する義務があるとさえ主張する」 (p.123)。図書館員、特に有色人種の図書館員は、新しい図書館や機関の形成や既存の制度的構造や社会的構造を非難する新たな批評を用いて、図書館情報学分野へのアプローチの仕方に主体的に奮闘した。新たな批評とは権力や知識生産との関係の分析である。

しかしながらこれらの成果は1980年代の新保守主義の興隆によって、また新たな「多文化主義」のレトリックの出現によって押しやられ、最終的にこの多文化主義は新保守主義の政治を刻み込んだ。このように多文化の言説が新保守主義の政治に取り込まれるとともに、人種を曖昧にするという新たな危険、文化の差異を賞賛するレトリックの促進という新たな危険が生じてきた。ゴードンとニューフィールド (1996) は、この種の言説を使用する際の矛盾を識別して、次のように述べている。「1980年代の多文化主義は白人の人種主義への新たな抗議を支援したのだが、同時に人種や人種主義の強調を文化的多様性の強調に置き換えたように思われる。多文化主義は人種の従属を拒否したものの、ときには従属を支持したように思う」 (p.3)。このような視座の移行は曖昧な政治的領域という遺産をもたらした。こうした遺産についてピーター・マクラレン (1994) は、保守/企業の多文化主義から急進的多文化主義にまで至ると特徴づけている。図書館情報学の言説で最も頻繁に出現するのは当たり障りのないリベラル多文化主義で、差異を賞賛し、「文化横断的な理解」を促進する。このリベラル多文化主義は人種や人種主義についての批判的分析とは無縁で、反人種差別の解放闘争よりも、資本主義市場と軌を一にする商品化された多様性経営を採用している。サン・ジュアン (2002) はスラボイ・ツイゼック (Slavoy Žižek) を敷衍して次のように要約した。「リベラルの民主的プロジェクトに内在する矛盾は、……他者 (the Other) の客体化にある。他者 (others) ——マイノリティ、新参者、移民、未登録外国人、難民など——を、民族風の光景や対

象物、「民族風の事物」(ethnic Thing)に矮小化してしまう。こうした「民族風の事物」は多国籍市場から解放され、また商品崇拜の支配から解放されているとされる」(p.347)。

多文化主義論議の声高な批評者ローナ・ピーターソン(1995)は次のような課題を提出している。

図書館員はこの語〔多文化：原文〕に多くの使い方をする。諸文献からは、人種的マイノリティに言及しているのか、周縁化や公平性に関心があるのか、単に異国風の差異を賞賛しているのかわからない。この配慮に欠ける語が図書館政策を形成して公平性を弱めている。いっそう悪いことに、あらゆる差異にたいして一律に「多文化」を適用することで、被抑圧者が経験している不正義を瑣末なものとする。図書館員は多様性の計画やプログラムを続ける前に、「多文化」の意味内容を明確にすべきである(p.30)。

ピーターソンが提案するように、図書館情報学を苦しめている人種や人種主義といった問題と本格的に闘うためには、またリベラル多文化主義を分解し、批判的多文化主義や急進的多文化主義を促進するためには、いっそう強力な介入が必要である。批判的多文化主義や急進的多文化主義(「多文化」という言説を用いる限りにおいてだが)は、図書館情報学分野の分析と実践に、人種をはじめとする支配をもたらす社会的基軸の重要性を再び中心に据える。同じようにマラブル(2001)は次のように述べている。「単に多様性を賞賛する代わりに、多様性の理論化と多様性の検討を行い、またさまざまなコミュニティの人びとの類似性と結びつきを積極的に求めなくてはならない。人種について話す代わりに、人種化の社会的プロセスを理論化しなくてはならないし、合衆国社会の一定のグループが法律、社会政策、経済的搾取によって抑圧状態に置かれている社会的プロセスを理論化しなくてはならない」(p.9)。要するに、図書館情報学は「急進的多文化主義」を取り込む必要がある。マクラレン(2003)は「急進的多文化主義」を次のように定義している。「社会主義者―フェミニストの多文化主義で、歴史に沈殿しているプロセスに挑戦する。そうしたプロセスを通して、人種、階級、ジェンダーに関するアイデンティティが資本主義社会の中に生産される。……〔また急進的多文化主義は：原文〕現代の社会構造における政治経済、文化、権力の深層構造の再構成に専念する。……〔さらに：原文〕被抑圧者という有利な地点から社会秩序を作り直すことに献身する」(p.291)。

しかしながら図書館情報学の状態はそうした枠組みの達成からはほど遠い。図書館情報学分野の人口動態統計は人種という点で乖離している。依然として図書館情報学の研究者や実務者は代表制政治といった限られた側面でも追いついてはいない。例えばクララ・チュー(1999)は以下のように述べている。

民族的マイノリティの学生を対象とするアメリカ図書館協会のスペクトラム奨学

金や、アメリカ図書館協会のこの2年間の年次大会で開催された多様性フェア (Diversity Fairs) といった活動は、多文化情報サービスや有色人種の図書館員が図書館分野の最優先事項であるような印象を与える。こうした取り組みは立派ではあるが、サービスでの公平性は依然として達成されていないし、有色人種の図書館員数は低位に留まっている (p.2)。

確かに多様化に向けてのこれらの取り組みは賞賛されるべき必要な介入である。しかし単なる数値や公平な代表制に集中することは、アイデンティティにまつわる政治の限定的な側面に訴えるにすぎない。そのような行動を率先することは多様性と差異を賞賛するリベラル多文化主義の一般的な行いに容易に落ち込むし、社会的正義と反人種主義に向けての集団的で解放的な闘いからも注意をそらせてしまう。言葉を換えて述べれば、包摂的多文化主義の(自己)賞賛的な展望では人種差別についての歴史的遺産や制度的表明を負かすことができないのと同じように、代表制だけでは図書館情報学での白人特権という問題を解決できない。代表制政治の限界、アイデンティティの商品化との共謀関係、それに差異についての新自由主義イデオロギーの進行を検討するプロセスによって、図書館情報学の多人種状況を求めて唱道するいっそう進歩的な協議事項が必要になることがわかる。したがって人種差別への反対闘争の再評価にあたって、有色人種の図書館員は支配的社会的制度的駆け引きにまつわる権力関係を認識しなくてはならない。そうした駆け引きはいっそう隠されたレベルにある構造的な人種主義に挑戦することはない。したがって図書館情報学に単に名目主義的に有色人種を包み込んでも、人種と人種主義に関わる全体的なシステムが基本的、制度的に変化することはない。

図書館情報学がいっそう解放的な道に向かうために、チュー (1999) は「変容のための情報サービス」を唱道する。このサービスは情報を「権力の言説」として概念化し、「……人種主義の支援、および人種や社会での正義を求める闘いのための支援の双方について、図書館および図書館員の役割を示す」(p.1)。さらにチューは次のように説明する。「私は図書館情報学分野に社会意識と人種意識を呼びかける。それは人種差別その他の抑圧的实践を説明するため、権利を剥奪された人びとの経験を説明するためである」(p.6)。そのような目標を意識に留め、それではどのようにすれば、人種と図書館についての批判的研究を概念化できるのであろうか。次章では図書館情報学の状況、人種について話す能力を欠くために生じている排除と差別、それに図書館情報学分野を形成しているホワイトネスについて探究する。そうした議論の中で、研究分野としての図書館情報学の認識論の再構成を主張する。また「変容のための情報サービス」に沿う新たな(学際的)専門性の枠組みの実行を主張する。

#### 4 人種主義の認識論（変容のための図書館情報学に向けての覚え書き）

犠牲者の状態を明示できる犠牲者は、もはや犠牲者ではなく、脅威を与える者になる。— James Baldwin (1976)

これまでの2つの章で探ったように、図書館情報学の分野は人種の研究に2つの問題あるパラダイムを内在させてきた。すなわちホワイトネスを認識していないことと、多文化主義を賞賛していることである。この双方が人種と人種の不平等に関する批判的言説を脱落させている。こうした限界の下で、アイデンティティと代表制を越えて、権力、特権、抑圧、搾取といった問題と結びつく社会システムとしての人種の検討を開始するには、どのように人種概念化に向けて格闘すればよいのだろうか。さらに図書館情報学に欠けているものを明示するだけでなく、最初にそうした脱落が生じた理由も問題にし、正確に理論化しなくてはならない。本章はこうした課題のいくつかを明るみに出して検討する。エスニック研究、クイア研究、フェミニスト研究——すなわち支配的言説の周縁に位置する声、社会がその社会特有のイデオロギーを複製する方法への洞察を与える声——からの理論や洞察を取り込む。そのことによって、図書館情報学の主流となる思考方法が差別の再生産の一端を担っていること、現在のホワイトネスのヘゲモニーを不安定にしかねない人びとの声の排除に仕えていることを理解できる。

図書館情報学分野へのアプローチ、および人種の理論化と図書館情報学との問題ある関係へのアプローチを考えるに際して鍵になるのは、図書館情報学は「自分たち自身の言説編成に閉じ込められている」(Wiegand, 1999 [p.31-32]) という考えである。既述のように、ハリス(1986)は、実証主義パラダイムが図書館情報学の多数の思想や研究を再生産し続けていることを論じている。実証主義の議論や批評でしばしば見逃されている事柄は、実証主義の起源が西洋哲学にあり、その役割は白人の人種学術プロジェクトの温存にあるということである。ロビン・ウィーグマン(1990)はこの種の学術的イデオロギー的な罫と刻み込みによる更新を、アカデミック・キャピタリズムおよび異性愛の白人男性ヘゲモニーの結果、とりわけ「ブルジョア主体」<sup>(7)</sup>の再生産という役割の結果と考えている。包摂や専門性の問題と同じように、学術研究へのウィーグマンの批評は、図書館情報学と非常に親和性がある。特に知識体系の再生産を、図書館情報学内の異性愛規範性の型として把握する場合にあてはまる。

筆者は図書館についての存在論的論議を白人の人種プロジェクトと把握し、続いて研究分野としての現在の図書館情報学がホワイト化という類似のプロジェクトに関与していると主張する。このプロジェクトが必ずしも意図的ではないとしても、その結果は依然として同じである——図書館情報学の中で人種主義に苦しめられている有色人種の声

を排除するということである。この「非意図性」という考えに注目することによって、実のところこの無害と思われる語が、いかに支配的で抑圧的な社会構造と共謀し、人種主義と白人至上主義の歴史の実体的結果を認識できないようにしてきたかを理解する必要がある。例えばアラン・バルベ（2001）は、ゲイ・ホワイトネスの非意図性を分析して次のように記している。

私にとっては、どのようにして人種の非意図性が構築されたのかということ、そして単なる偶然ではないということを正確に理解することが重要である。白人が決して白人グループ、白人の組織、白人の部門であると意識的に決定しない限り、またたとえ有色人種がその場に居ないとしても、私たち各人が有色人種を常に歓迎していると信じている限り、私たちは自分たちのホワイトネスを検討する必要はない。なぜなら、それは意図的でないと信じることができるからであり、そこに居ることは私たちの理由ではないからである（p.252）。

バルベの言葉は人種化された分野の構築のされ方を強調する点で特に洞察に富む。あるいは本稿の議論に照らせば、どのようにして図書館情報学が白人の研究分野として構築されたのかということである。したがって以下の考察は、人種排除についての図書館情報学の認識論上の関心と示唆を説明することにある。

図書館情報学の文献のやっかいな動向は、人種の相違が決して明示されていないという点にある。換言すれば、「普遍的な」知識として重視されるものは白人の視座によるが、それは問題にされないし、認識もされない。言うまでもなく、これは啓蒙主義の価値と実証主義の哲学の産物である。さらに筆者は、これらをホワイトネスのはっきりとした産物、特に白人の人種特権の明白な産物と主張する<sup>(8)</sup>。図書館情報学の分野では、この白人の認識論の伝統が白人のヨーロッパ中心主義の知識の編成を導き、それが学術を形成し伝達する正統な知識の形（*the legitimate form of knowledge*）として出現した。マニング・マラブル（2001）は次のように書いている。「ホワイトネスは人種について考える必要がないという贅沢を白人に与えている。なぜならホワイトネスが普遍的な基準として設定される時、それはすべての他者の社会的現実を枠づけるからである」（p.7）。この種の思想取り締まりは、問われもされず問題にもされないイデオロギーの力として、図書館情報学でホワイトネスの再生産を許し、その中で学術の装置を統制するすべての人（学術研究者、管理者、出版者）は、「ホワイトネスへの執拗な投資」を支えている。したがって人種主義の明示は不必要となる。なぜならそのような規制システムは不可視のイデオロギーのレベルですでに存在しているからである。ロバート・グラウナーはこの種の構造的な人種主義のメカニズムを論じ、以下のように指摘している。「諸機関は慣習となっている手続き、官僚システムの規則や規制の一部になっている手続きによって、人種グループの参加を排除したり制限したりしている。したがって排除や制限の動



機となる誘因としての偏見は不必要である」(quoted in San Juan, 1998, p.45)。

筆者は図書館の実務者や研究者とインフォーマルな討論を行ったが、多くは有色人種であった。そこで表明された思想は必ずしも新しくも画期的でもなかったと信じている。むしろそうした思想は学術研究で理論化されていなかったのである。それは既に検討した人種差別的な知識プロジェクトのためである。エスピナル (2001) が次のように書く時、同じような関心を表明している。「ホワイトネスの概念は有色人種の図書館員の文化や言説では新しいものではない。……おそらく新しいのは、こうした問題を理論的な装置の中に枠づけることである」(p.137)。——特にエスニック研究や女性研究といった「アイデンティティを土台とする」分野、および歴史学や社会学といった伝統的な学問分野で——、この10年間にホワイトネスの批判的研究は学術的着想に関わる大きな部分を占めるようになってきている。そして指摘に値する興味深いことだが、分析に不可欠な基軸としてのホワイトネスが、ほんの今になって図書館情報学に入ってきたのである。これは2つのレベルで興味深い——まず図書館情報学といった学際分野にこの種の批評が入り込むのに長時間かかったという事実であり、次に人種についての批判的検討はホワイトネスを中心にして始まるという事実である。

こうしたすべての議論は、図書館情報学が人種や人種特権について明確な表明ができなかったことを示している。ピーターソン (1996) は図書館情報学の現状に不満を示し、次のように書いた。

人種や人種主義は特に図書館と関連しており、人種や人種主義の理解に図書館専門職が真剣であるなら、それらを周縁から中心に移すだろう。人種研究は他の分野と同じように知的な専門領域としての敬意に値し、個人的な特徴や経験に由来する主題領域として却下されることはない。個人的な経験ではなく、学術的問いかけ、知的な活性、統合性と権威性が専門家の能力とみなされる研究者の領域として人種研究を認めることは、脅威となる。というのは学術研究にふさわしい経験としての白人の経験を押しつけるからである。この傲慢さと無知が図書館での人種研究の興隆を妨げている (pp.172-173)。

この問題を扱うには、図書館情報学分野での知識生産が非白人の思想を人種差別的に排除し続けている方式を調べなくてはならない。ピーターソンは図書館情報学分野の現在の研究者／学術研究の無知と傲慢さについて主張している。このピーターソンの主張を完全に遠ざけるつもりはないものの、学界内で全体的に人種化された知識の政治経済の中で、これらの信念体系を文脈化しなくてはならない。このプロセスの一部分は、サンドラ・ハーディング (1989) が提起するように、すべての西洋の科学や知識体系をローカルな知識と把握する必要があるという認識にある。そのことによって非西洋、非白人の研究者の業績が、単に周辺的な思考分野として把握されることがなくなる。言葉を換

えて言うと、「誰の科学なのか」、「誰の知識なのか」(Harding, 1991)といった質問を発することが必要で、この問いかけが図書館情報学でのエスノセントリズム、すなわちホワイトネスの特権を変容させる鍵になる。そして図書館情報学を、特権と差別の所在を突き止め、(人種、ジェンダー、階級など)社会的に埋め込まれたものの識別に向かわせ、図書館情報学分野での知識の生産と受容の双方を検討するという方向に修正するのである。

現在の図書館情報学の状態をローカルな知識体系、とりわけホワイトネスの声が支配している体系とみなせば、非白人のローカルな知識体系をいっそううまく見つけ出すことができるにちがいない。そうしたローカルな知識体系は、沈黙を強いられ、周縁化され、看過されてきた人口グループをいっそう十分に包み込む。例えばビニー・テイトは、図書館情報学研究がブラックネスを単一化する傾向にあると論じている。すなわち都市化が進んだニュー Yorker と貧しい村落の南部人などのような、多様な現れを考慮していないというのである (Stern, 1991)。テイトが指摘する個別性は、人種に関する言説でさえも、「ブラックネス」という全体化する見方では、黒人全体にたいして普遍性を主張できないことを示している。私たちは人種を、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、地理といった他の異なる基軸を通して構築されるものとして説明しなくてはならない。このような新しい視座と枠組みによって、これまで図書館情報学分野の研究者が無視してきた抑圧された種類の知識への洞察を大いに深めることができる。したがって異なる見解を取り込むことは、単に公平な代表制に関わる問題ではない。むしろハーディング (1989) が指摘するように多様性は認識論からして必要なもので、ハーディングは次のように述べている。「支配的な信念体系に最も批判的な視座を持つと思われる社会的グループが、研究コミュニティのフォーマルおよび／あるいはインフォーマルなプロセスを通して組織的に排除や過小評価されているなら、研究コミュニティで表明される信念に最も批判的でオルタナティブな複雑な問題、仮説、概念、証拠は、まったく発せられない」(p.13)。

人の特定の社会的地点、およびそうした地点から探りうる洞察や知識——フェミニストのスタンドポイント理論の特質——の重要性を認識することによって、図書館情報学の分野はいっそう包摂的な知識体系に向かうことができる。このシステムは異なる人種的背景を持つ人の声を取り込む。そのことによって、「各被抑圧者グループはそのグループの抑圧状況の特徴を、支配的社会の思考や構造についての批判的洞察の源にする明確な機会を識別できるようになる。したがってスタンドポイント理論は社会的、政治的な不利益を、認識論、科学、政治で利点にできる方法を描くことになる」(Harding, 1989, pp.7-8)。こうした思想を取り込まなければ、まさに認識論レベルで人種主義の形態が生じる。

認識論的な人種主義という思想は、教育理論家のシューリッヒとヤング（1997）が用い、両者は次のように述べている。

私たちの現在の研究の範囲で、認識論——実証主義からポストモダニズム／ポスト構造主義に至る——は、支配的人種の社会史および文化から生じている。こうした認識論は支配的人種グループの社会史を必然的に反映し補強する（一方、他の人種／文化の認識論を排除する）。また有色人種全般、特に有色人種の研究者に否定的な結果をもたらす（p.8）。

図書館情報学における認識論上の人種主義を識別し把握することは、人種と社会的責任の理論を前進させる第一歩になる。とはいえ、単に異なる視座を識別し追加するだけでは、前章で論じた多文化主義者のアイデンティティの商品化に近いだろう。この種の個人主義者の名目主義を避ける必要がある。というのは「あくまで西洋の白人至上主義者の前提で構成されてきた科学技術へのアプローチに、単に人種主義と帝国主義の諸問題を加える……ことはできないからである」（Harding, 1989, pp.10-11）。要するに、人種プロジェクトや人種差別プロジェクトによって深く形成されてきた図書館情報学に、どのようにすれば自然かつ問題を引き起こさないようにしてオルタナティブな視点を組み込むことができるかということである。

このことは、支配的な学術研究や言説を染み込ませるためのすべての介入や取り組みが、抑圧システムを温存せざるをえないということの意味しているのではない（筆者はこのような全体的な語で、制度的な知識や個人の主体を一般化できるとは決して考えていない）。フェミニストやポスト植民地主義の研究者が指摘するように、従来の科学における植民地や人種差別に関する認識論や使用にも関わらず、このことは社会的に進歩的な諸目的を活性化するために、科学が果たす可能性を妨げはしない。その代わりに、これまで周縁化されていた声を取り込むことで、科学や科学的探究を変容させ、有色人種、女性、ゲイやレズビアンといった被抑圧グループの関心を含めることができる<sup>(9)</sup>。これらのグループは科学的探究の方向転換に役立つし、新しい認識論の可能性へのスペースを開くのに役立つ。そうした例を真剣に考えることで、図書館情報学はこの拡大された枠組みから利益を獲得できる。そのためにはチャンドラ・モハンティ（2003）が「異議の公共文化」と呼ぶものを確立する必要がある。「異議の公共文化は認識論の立脚点のためのスペースを創り出す。このスペースは人びとの関心を土台とし、対立、特権、支配の実体を認識する。したがってそうした文化の創出は、基本的に権力の基軸を、学術研究、専門性、制度といった構造の文脈で、また学術界の（個人的関係よりも）対人関係の文脈で透明なものにする」（p.216）。

しかし図書館情報学の文脈の場合、この分野、およびその専門性や組織の構造にオルタナティブな（再）概念化を据えたい。1960年代にとりわけ正統な地位を得た句、現在

では使い古された句を発動したい。図書館情報学は伝統的な学術と学習の専門性モデルに反対し、1960年代の社会運動に続いて出現した研究分野——すなわちエスニック研究、女性研究、クエア研究——を見習う必要がある。そしてしばしば耳にする「人びとへのサービス」という目標に真剣に専念する必要がある。いっそう具体的に述べれば、図書館情報学での大きな人種格差に取り組むために、アフリカ系アメリカ人研究、アジア系アメリカ人研究、チカノ研究、ネイティヴ・アメリカ人研究といったエスニック研究の分野に注意を向けることである。そのことによって図書館情報学は抑圧の理論化に成功し、大学と有色人種コミュニティとのギャップに橋渡しができる。マラブル（2001）は次のように指摘している。「エスニック研究の土台、すなわち合衆国のマイノリティの人びとに関する豊かで複雑な学術研究の土台には、構造的な人種主義、システムとしての人種主義と命名できるものへの批評がある」（p.7）。成功したエスニック研究のモデルは、教育を再定義し、コミュニティを土台とする知識に価値を置き、理論研究の特権と権力に組み込む弁証法的実践に関与し、このモデルを現実という実体的状況を変容させるために戦略的に用いる。

図書館情報学教育の土台はエスニック研究モデルに役立つように思われる。というのは「単なる学術研究ではなく、学術研究とコミュニティの関与を結びつける必要性の確信に由来する、新しい型の業績を学界に導入 [しようとする]」（Dirlik, 2003, p.167）点で、両者は関心を共有しているからである。しかし現在の図書館情報学はエスニック研究が出現する土台となった社会的正義についての展望を欠いている。もし図書館情報学が人種について有意義な論議に本当に従事しようとするならば、社会的正義の精神を取り込む必要がある。エスニック研究と女性研究の持続する遺産を論じるに際して、モハンティ（2003）は次のように書いている。「私たちの制度的な実践を根本から変容させる闘いは、正確な歴史と理論による搾取と抑圧の分析を根底にすること、私たち自身を学界での積極的活動主義者と把握すること、社会的正義を求める運動と教育学的、学術的な営為を結びつけること、そして私たち自身、同僚仲間、学生に非常に多くのレベルでの活動を期待し要求することを含む」（p.216）。これらは図書館情報学といった分野に希望すべき期待や願いと同じである。そして図書館情報学の分野は私たちのコミュニティの生活、それに無知、抑圧、周縁化に反対する私たちの集団的な闘いを土台にしている。さらにモハンティが指摘するように、こうした変化は単に学界だけでなく、あらゆる異なるレベルで開始される必要がある。それは本当に——図書館情報学自体と世界を——変容させる図書館情報学を先導するためである。

## 5 社会的正義と図書館情報学：未完のプロジェクト

そのイギリス人作家に私の母校は本であり、いい図書館だといった。

— Malcolm X. (196 [p.330])

オードリー・ロードは有名な詩人／積極的活動主義者／研究者で、以前は図書館員であった。かつてロード（1984）は、「私が図書館員になったのは情報の組織化と分析の道具を獲得できると本当に信じていたからである。世界のあらゆる事柄を知ることはできないだろうが、世界を学ぶ道具を獲得できるだろう。しかしそれは限られた価値しかなかった」（p.105）と書いた。ロードにとってドキュメンテーションや分類といった道具の限界は、単なる知識の存在や獲得は必ずしも理解に結びつかないと認識したことによる。ロードが述べるように、「それら [知識と理解：原文] は一体となって機能できる。しかし互いを置き換えることはできない」（p.104）。それは図書館情報学のジレンマでもある。人種の不平等と新帝国主義的資本主義のグローバルな広がりによります方向づけられた世界において、社会的文脈を欠く情報は変容をもたらす主体としての可能性を全うできない。図書館が歴史で果たしてきた問題に満ちた役割にも関わらず、公共圏が縮小する状況にあって、図書館は最後に残存する公共圏の1つである。そうした図書館は「自己解放および社会解放のための闘争の中心拠点として、リテラシーと市民権を再設定する1つの批判的カテゴリ」（Giroux, 2001, p.116）を占める見込みを有する。図書館がこうした目標を達成するには、人種主義をはじめとする差別との闘いに、白人特権で利益を得ている人や人種主義の結果で苦しんでいる人だけでなく、自己解放および社会解放に向かう集団的な取り組みに、すべての人が参加しなくてはならない。

ブラジルの批判的教育家パウロ・フレイレ（1987）は、この解放の可能性を認識して次のように書いている。「文化と学習のセンターとしての通俗図書館は、単なる沈黙の図書貯蔵所ではなく、テキストを文脈と関連づけて正しく読めるようにする発達と強化のための基本的な要素である」（pp.44-45）。フレイレにとって図書館はコミュニティに不可欠な部分として作用し、図書館は「書かれた言葉の神秘的な理解」や「批判的で民主的な精神」（p.48）といった価値を包み込んでいる。同じようにマルコム X（1965）は刑務所図書館での読書時間を人生を変える経験、自分自身の個人的なスクーリングの形態と考えていた。マルコムは「当時の私がむさぼるように読んだほどには、どこの大学でも学生に本を読むことを要求しなかつただろう。こうして私の前には、読んで理解できるという新しい世界がひらけてきたのである」（p.173 [p.321]）と書いている。実のところこれらの進歩的な積極的活動主義者や教育家にとって、図書館は政治問題化や社会解放のプロセスにおいて、知識や理解に到達する不可欠な空間として作用していた。

ここでオードリー・ロードの経験に戻る。ロードは図書館員として働いた後に図書館を去り、他の政治的プロジェクトを追求した。ロードは「私がトーガルー [カレッジ, Tougaloo, MS] を離れる頃になると、私が必要とする仕事は教職であり、図書館の仕事では……十分でないとわかっていた」(p.92)と書いている。ロードの言明で非常に興味深かったのは、司書職と教職についてのロードの描写である。図書館の仕事自体が教育の1つの形態ではないだろうか。ロードなどの進歩的な性向の個人が、司書職と社会的正義のための闘いの間に認識する断絶は、一体何なのだろうか。これらの問いを、図書館情報学に関わる私たちは真剣に検討しなくてはならない。図書館情報学の分野では、私たちが生きる社会的、政治的文脈に上手に関与する必要性が明らかに高まっているからである。かつてフランツ・ファノン(1963)は、「各世代は、相対的な不透明さのなかにおいてそれぞれ自己の使命を発見し、その使命を果たし、ないしはそれを裏切ることになるはずである」(p.206 [p.198])と記した。新植民地主義の資本家による富の蓄積、継続的に広がる帝国主義者の暴力とグローバルな人種主義という世界にあって、いままで以上に図書館情報学分野は反人種主義と社会的正義への新たな責任感を明示する緊急の必要性がある。そのような目標に至る道は依然として方向づけられていない。しかしさまざまに連動している抑圧システム、そうしたシステムと図書館情報学分野の交差について、批判的な対話が可能なスペースを開くことが、図書館の社会闘争地図を作成する最初の歩みとなる。そして最終目標は変容である。

#### 注

- (1) 本稿が扱う人種と図書館情報学にまつわる論議は特に合衆国の状況に焦点を当てている。
- (2) サン・ジュアン(2000)は合衆国について「移民モデル」よりも「植民者社会」というパラダイムを用いている。それは「非白人のグループやコミュニティ(先住民、奴隷、被征服者)にたいする人種に基づく公認された従属を」を説明するためであり、「そうした従属は『内なる植民地主義』という類似の概念を生む」(p.162)。
- (3) しかしながら筆者は決して図書館について、そのような偏狭な決定論的見解を唱道しているのではない。むしろ筆者は、図書館情報学分野での人種主義の起源、それゆえにこの分野の人種化された構造の検討が必要なこと、さまざまな形態のホワイトネスの認識、脱構築、再解釈が必要なことを主張している。それは図書館情報学の分野が進展し、研究者や実務者が合衆国における人種と図書館との問題ある性格を認識するためである。オミとウィナント(1994)は次のように述べている。「私たちが今日直面する人種編成のプロセス、合衆国社会を非常に多くの方式で構造づけている大小さまざまな人種プロジェクトは、複雑な歴史的進化における現在の結果にすぎない」(p.61)。
- (4) ホワイトネスは単に黒人/白人という人種2分法に限定されるのではなく、多様な「人種的他者」との関係で形成されており、その形成の方法を指摘するのは重要である(Roediger, 2002, p.17)。さらに人種の問題は多人種、多民族の人びととその問題を検討するといっそう複雑になり、このことも指摘されるべきである。同時に、「人種を乗り越えた」とする議論が示す賞賛的な考

え方にも警戒しなくてはならない。この賞賛的な考えは人種ブラインドで人種中立の将来の調和  
社会の証拠として、多人種、多民族の人びとを押し切る。このような言説は問題である。人種を  
非歴史のものとして扱い、合衆国における人種の編成（人種混合の長い歴史を持つ）という遺産  
を検討せず、権力や特権の問題を無視する。こうした権力や特権は人種が合衆国社会での人生機  
会を依然として構造づけている方式と結びついている（Roediger, 2002, p.10）。

- (5) 「あなたの図書館で」 (@ your library) は、アメリカ図書館協会のプロジェクト「アメリカの  
図書館のための運動」(Campaign for America's Libraries) が採択したスローガンで、この  
プロジェクトは5年間とされている。目的はコミュニティでの図書館や図書館員の重要性を訴え、  
可視性と理解を高めることにある。さらなる情報はアメリカ図書館協会のウェブサイトを参照。  
<https://cs.ala.org/@yourlibrary/>.
- (6) アメリカ図書館協会の「リテラシーとアウトリーチ・サービス部」(Office for Literacy and  
Outreach Services, OLOS) が、民族資料情報交換ラウンドテーブル (EMIERT) を調整し支  
えている。同ラウンドテーブルは民族資源の識別と開発、民族情報の提供に焦点を当てているも  
のの、同ラウンドテーブルの全体的な使命の一部として人種や人種の不平等に焦点を据えてい  
るわけではない。さらに指摘すべきだが、人種を土台にする4つの図書館員の団体が発展し、現  
在はアメリカ図書館協会と独立して（しかし提携している）存在している。これらの団体は有色  
人種の図書館員や有色人種への図書館情報サービスにとって喫緊のニーズを取り上げて重要な仕  
事を行っている。しかし図書館情報学の構造的な人種主義と取り組むについて、依然として積極  
的で一体化した長期的アプローチを採用してはいない。
- (7) ウィーグマンはブルジョア主体を次のように定義づけている。「資本主義の経済秩序と民主的  
市民という政治哲学との矛盾に満ちた結びつきに由来する社会的主体——そうした主体は資本主  
義に内在する経済的、政治的ヒエラルキーと厳格に結びつきながら、同時に自分自身の意志によ  
る自己の生成と維持を主張できる」(p.7)。
- (8) もちろん啓蒙主義の価値や実証主義は、人種主義、植民地主義、皮膚の色に依拠する人口グル  
ープ全体の奴隷化と内在的に結びついている。例えば以下を参照。Goldberg (1993) ; Wiegman  
(1997)。
- (9) そうしたプロジェクトの例は以下の論集を参照。Figuroa and Harding (2003) ; Harding  
(1993), Nader (1996)。

#### 参考文献

- American Library Association. (2004). *Recruitment for diversity*. Retrieved May 31, 2004  
from <http://www.ala.org/ala/diversity/divrecruitment/recruitmentdiversity.htm>.
- Baldwin, J. (1976). *The devil finds work: An essay*. New York: Dial Press.
- Bérubé, A. (2001). How gay stays white and what kind of white it stays. In Rasmussen,  
B. B., Nexica, I. J., Klinenberg, E. & Wray, M. (Eds.), *The making and unmaking of  
whiteness* (pp.234-265). Durham, NC: Duke University Press.
- Blauner, R. (1972). *Racial oppression in America*. New York: Harper & Row.
- Budd, J. (1995). An epistemological foundation for library and information science.  
*Library Quarterly*, 65, 295-318.
- Chu, C. (1999). Transformative information services: Uprooting race politics. *Proceedings  
of the Black Caucus of the American Library Association Conference, 19th-22nd July  
1999, Las Vegas*, 1-8.

- Davis, A. (1996). Gender, Class and Multiculturalism: Rethinking "Race" Politics. In Gordon, A. & Newfield, C. (Eds.) *Mapping multiculturalism* (pp.40-48). Minneapolis: University of Minnesota Press.
- De la Pena McCook, K. (Ed.). (2000). Ethnic diversity in library and information science. *Library Trends*, 49, 1-219.
- Du Bois, W. E. B. (1982). *The souls of black folk*. New York: Penguin. (Original work published 1903) [W・E・B・デュボイス『黒人のたましい』木島始ほか訳, 岩波書店, 1992].
- Du Mont, R. R., Buttler, L., & Caynon, W. (1994). *Multiculturalism in libraries*. Westport, CT: Greenwood Press.
- Du Mont, R. R. (1986). Race in American librarianship: Attitudes of the library profession. *Journal of Library History*, 21, 488-509.
- Espinal, I. (2001). A new vocabulary for inclusive librarianship: Applying whiteness theory to our profession. In Castillo-Speed, L. (Ed.), *The power of language/El poder de la palabra* (pp.131-149). Englewood, CO: Libraries Unlimited.
- Ethnic and Multicultural Information Exchange Round Table. (2002). *A short history of EMIERT*. Retrieved May 31, from <http://lonestar.utsa.edu/jbarnett/history.html>.
- Fanon, F. (1963). *The wretched of the earth*. (C. Farrington, Trans.). New York: Grove Press. (Original work published 1961) [フランツ・ファノン『地に呪われたる者』(新装版) 鈴木道彦・浦野衣子訳, みすず書房, 2015].
- Figuroa, R. & Harding, S. (Eds.). (2003). *Science and other cultures: Issues in philosophies of science and technology*. New York: Routledge.
- Frankenberg, R. (2001). The mirage of an unmarked whiteness. In Rasmussen, B. B., Nexica, I. J., Klinenberg, E. & Wray, M. (Eds.), *The making and unmaking of whiteness* (pp.72-96). Durham, NC: Duke University Press.
- Freire, P. & Macedo, D. (1987). *Literacy: Reading the word and the world*. Westport, CT: Bergin & Garvey.
- Fusco, C. (1988). Fantasies of oppositionality. *Afterimage*, 16(5), 6-9; *Screen*, 29(4).
- Giroux, H. A. (2001). *Theory and resistance in education: Towards a pedagogy for the opposition*. Westport, CT: Bergin & Garvey.
- Goldberg, D. T. (Ed.). (1994). *Multiculturalism: A critical reader*. Malden, MA: Blackwell.
- Goldberg, D. T. (1993). *Racist culture: Philosophy and the politics of meaning*. Malden, MA: Blackwell.
- Gordon, A. F. & Newfield, C. (1996). *Mapping Multiculturalism*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Harding, S. (1987). Taking responsibility for our own gender, race, class: Transforming science and the social studies of science. *Rethinking Marxism*, 2(3), 8-19.
- Harding, S. (1991). *Whose science? whose knowledge?: Thinking from women's lives*. Ithaca, NY: Cornell University Press.
- Harding, S. (Ed.). (1993). *The racial economy of science: Toward a democratic future*. Bloomington: University of Indiana Press.
- Harris, M. H. (1973). The purpose of the American public library: A revisionist interpretation of history. *Library Journal*, 98, 2509-2514.



- Harris, M. H. (1986). The dialectic of defeat: Antimonies in research in library and information science. *Library Trends*, 34(3), 515-531 [マイケル・H.ハリス「勝敗の弁証法：図書館情報学研究におけるアンチノミー」根本彰編訳『図書館の社会理論』青弓社, 1991, p.13-42].
- Harris, M. H., Hannah, S. A., & Harris, P. C. (1998). *Into the future: The foundations of library and information services in the post-industrial era*. Greenwich, CT: Ablex.
- hooks, b. (1997). Representing whiteness in the black imagination. In Frankenberg, R. (Ed.), *Displacing whiteness: Essays in social and cultural criticism*. Durham, NC: Duke University Press, 165-179.
- Jones, P. A., Jr. (1999). *Libraries, immigrants and the American experience*. Westport, CT: Greenwood Press.
- Lipsitz, G. (1998). *The possessive investment in whiteness: How white people benefit from identity politics*. Philadelphia: Temple University Press.
- Litwack, Leon. (1999, June 4). Race: The Enduring Problem of the 20th Century. *San Jose Mercury*. Retrieved June 4, 2004 from <http://www.afsc.org/pwork/1299/1210a.htm>.
- Lorde, A. (1984). *Sister outsider: Essays and speeches*. Trumansburg, NY: Crossing Press.
- Malone, Cheryl Knott. (2000). Toward a multicultural American public library history. *Libraries & Culture*, 35, 76-87.
- Marable, M. (2001). Transforming ethnic studies: Theorizing multiculturalism, diversity, and power. *Souls*, 3(3), 6-15.
- McLaren, P. (1994). White terror and oppositional agency: towards a critical multiculturalism. In Goldberg, D. T. (Ed.), *Multiculturalism: A critical reader* (pp.45-74). Malden, MA: Blackwell.
- McLaren, P. (2003). *Life in schools: An introduction to critical pedagogy in the foundations of education*. Boston: Allyn & Bacon.
- Mohanty, C. T. (2003). *Feminism without borders: Decolonizing theory, practicing solidarity*. Durham, NC: Duke University Press.
- Nader, L. (Ed.). (1996). *Naked science: Anthropological inquiry into boundaries, power, and knowledge*. New York: Routledge.
- Nauratil, M. J. (1985). *Public libraries and nontraditional clientele: The politics of special services*. Westport, CT: Greenwood Press.
- Neely, T. Y. & Abif, K. K. (Eds.). (1996). *In our own voices: The changing face of librarianship*. Lanham, MD: Scarecrow Press.
- Omi, M. & Winant, H. (1994). *Racial formation in the United States: From the 1960s to the 1990s*. New York: Routledge.
- Peterson, L. (1995, July). Multiculturalism: Affirmative or Negative Action? *Library Journal*, 120, 30-33.
- Peterson, L. (1996). Alternative perspectives in library and information science: Issues of race. *Journal of Education for Library and Information Science*, 37(2), 163-174.
- Radford, G. (2003). Trapped in our own discursive formations: Toward an archaeology of library and information science. *Library Quarterly*, 73(1), 1-18.
- Reese, G. L. & Hawkins, E. L. (1999). *Stop talking start doing!: Attracting people of color*

- to the library profession. Chicago: American Library Association.
- Roediger, D. R. (2002). *Colored white: Transcending the racial past*. Berkeley: University of California Press.
- Rubin, R. (2000). *Foundations of library and information science*. New York: Neal-Schuman Publishers [リチャード・ルービン『図書館情報学概論』根本彰訳, 東京大学出版会, 2014 これは原著第3版(2010)の抄訳である].
- Scheurich, J. J. & Young, M. D. (1997). Coloring epistemologies: Are our research epistemologies racially biased?" *Educational Researcher*, 26(4), 4-16.
- San Juan, E., Jr. (1998). *Beyond postcolonial theory*. New York: St. Martin's Press.
- San Juan, E., Jr. (2002). *Racism and cultural studies: Critiques of multiculturalist ideology and the politics of difference*. Durham, NC: Duke University Press.
- Stern, S. (1991). Ethnic libraries and librarianship in the United States: Models and prospects. *Advances in Librarianship*, 15, 77-102.
- Takaki, R. (Ed.). (1987). *From different shores: Perspectives on race and ethnicity in America*. New York: Oxford University Press.
- Wiegand, W. A. (1999). Tunnel vision and blind spots: What the past tells us about the present: Reflections on the Twentieth Century history of American librarianship. *Library Quarterly*, 60(1), 1-32 [ウェイン・A. ウィーガン「20世紀の図書館・図書館学を振り返る: 狭い視野と盲点」川崎良孝訳, 川崎良孝編著『図書館・図書館研究を考える: 知的自由・歴史・アメリカ』京都大学図書館情報学研究会発行, 日本図書館協会発売, 2001, p.3-44].
- Wiegand, W. A. (2000). American library history literature, 1947-1997: Theoretical perspectives? *Libraries & Culture*, 35(1), 4-34.
- Wiegman, R. (1997). Queering the academy. *Genders*, 26, 3-22.
- Winant, H. (2001). White racial projects. In Rasmussen, B. B., Nexica, I. J., Klinenberg, E. & Wray, M. (Eds.), *The making and unmaking of whiteness* (pp.97-112). Durham, NC: Duke University Press.
- X, M. (1965). *The autobiography of Malcolm X*. New York: Ballantine Books [マルコム X『(完訳) マルコム X 自伝』濱本武雄訳, 中央公論社, 2002].

## 訳者あとがき

川崎良孝

本稿はトッド・ホンマ著「図書館情報学での人種の不可視性: 皮膚の色による差別につまずく」(Todd Honma, "Trippin' Over the Color Line: The Invisibility of Race in Library and Information Studies," *InterActions: UCLA Journal of Education and Information Studies*, vol.1, no.2, 2005, Article 2 (p.1-26)) の全訳である。ホンマはカリフォルニア大学ロサンゼルス校で図書館情報学とアジア・アメリ

カ研究 (Asian American Studies) の修士号を持ち、その後、南カリフォルニア大学で博士号を獲得した。2012年からはカリフォルニア州クレアモント (Claremont) にあるピッツァー・カレッジ (Pitzer College) のアジア・アメリカ研究の助教授である。

2017年11月18日と19日、日本図書館研究会の第12回国際図書館学セミナーが同志社大学を会場にして開催された。その時、筆者はシンポジウムで「図書館トリニティのその後：アクセス再考 (アメリカを例に)」との題目で報告した (「第12回国際図書館学セミナー」『図書館界』vol.69, no.6, March 2018, p.367-371)。そしてアメリカ公立図書館では1890年代からアメリカ化という意味での教育への関心が高揚したが、現在ではデジタル・リテラシーの育成という意味での教育への関心が高まっているとまとめた。前者はアメリカの価値を移民や労働者に植え付けるという意味での教育であり、後者はそうした価値を教え込むのではなく、情報へアクセスするための技量を身につけるための教育であるということになる。換言すれば、現在の教育への関心は19世紀末とは相違し、価値中立というわけである。こうした報告にたいして、和気尚美 (三重大学) さんから、「現在の公立図書館が示す教育への関心に価値の教え込みという側面はないのか」という質問がでた。アメリカ図書館協会などの公式の方針文書などをみると、公立図書館はあらゆる見解を利用者に提供し、利用者 (社会) がその価値や是非を判断し決定するという立場を取っている。これは現在のアメリカ公立図書館の基本原則なので、上述の質問には「価値の教え込みという側面はない」と答えるのが順当な応答だし、筆者はそうのように答えた。ただし単純に「価値の教え込みという側面はない」と断言するのにも躊躇があったので、アメリカでは1990年代半ばからホワイトネス研究 (whiteness studies) が文学、歴史、社会学などで興隆してきていると述べて、その骨格を簡単に説明した。

筆者が訳したホンマ論文は図書館情報学の分野にホワイトネス研究を持ち込み、その重要性を示した最初の文献である。そして2017年になってホワイトネスを書名にした最初の図書館情報学の論文集『ホワイトネスのトポグラフィー』(Gina Schlesselman-Tarango, ed., *Topographies of Whiteness: Mapping Whiteness in Library and Information Science*, Sacramento, CA, Library Juice Press, 2017) が刊行された。この論文集に収録された14の論文の質はさまざまだが、同書にホンマは序文を寄稿している。

ホワイトネス研究に関する日本語の図書としては、この分野の指導的な研究者であるデイヴィッド・R. ローディガーの著作の翻訳『アメリカにおける白人意識の構築：労働者階級の形成と人種』(小原豊志ほか訳, 明石書店, 2006)、それに藤川隆男編『白人とは何か？：ホワイトネス・スタディーズ入門』(刀水書房, 2005) といった単行書、さらに雑誌論文としてはデイヴィッド・W. ストウの「アメリカ研究における白人性の

諸問題」(坂下史子訳『同志社アメリカ研究』no.36, 2000, p.33-44)など一定数の業績がある。例えば訳者にとって“possessive investment”などは訳しにくい語であったが、上述のストウ論文の訳では「執拗な投資」と訳されており、それを用いている。また藤川隆男は留保しつつ、“racial blindness”を「人種色盲」と訳しているが、これは「人種ブラインドネス」と訳しておいた。“standpoint theory”は「スタンドポイント理論」と訳したが、この訳語や内容についてはS.ハーディング『科学と社会的不平等：フェミニズム、ポストコロニアリズムからの科学批判』(森永康子訳, 北大路書房, 2009, p.130-142)を参考にした。

さらに多文化や市民性については多くの日本語文献があるが、とりわけ以下を参考にした。ウィル・キムリッカ『多文化時代の市民権：マイノリティの権利と自由主義』(角田猛之・石山文彦・山崎康仕監訳, 晃洋書房, 1998)、ウィル・キムリッカ『土着語の政治：ナショナリズム・多文化主義・シティズンシップ』(栗田佳泰・森敦嗣・白川俊介訳, 法政大学出版局, 2012)、デレック・ヒーター『市民権とは何か』(田中俊郎・関根政美訳, 岩波書店, 2002)。

図書館界の原則の1つである中立性は1960年代から常に批判されてきたし、図書館情報学の実証主義や客観主義についてもマイケル・H.ハリスなどが批判してきた。(リベラル)多文化主義が人種や人種主義を後方に退けていること、政治性を捨象し、もっぱら文化の多様性を賞賛していることも指摘されてきた。さらに図書館情報学教育における人種の脱落とその意味についても、クリスティン・ポーリー(Christine Pawley)などが厳しく指摘してきた。ホンマが指摘する各事実の多くはすでに言及されてきたことである。ホンマ論文の重要性はそれらの個別的な指摘を、文学、社会学、歴史学で興隆しつつあるホワイトネス研究という包括的な枠組みの中で位置づけ、解釈したことにある。

図書館界の主流はリベラル多文化主義なのだが、ホンマ論文はこの多文化主義を厳しく批判し、急進的多文化主義、批判的多文化主義を主張している。その是非はともかく、ホンマ論文は結論部分でマルコムX、フレイレ、ファノンなど1960年代後半からの理論家、実践家の主張を用いてまとめている。彼らの主張の図書館界での表明は(たとえそうした思想家の思想をそのまま取り込んでいないとしても)、アメリカ図書館協会的主流派に異論を突きつけるという点では、社会的責任ラウンドテーブルの思想と実践ということになる。社会的責任ラウンドテーブルの思想や実践とホンマの考えには大きな隔たりがあり、そのことは指摘するに値する。基本的に社会的責任ラウンドテーブルは図書館界の主流派に異論を突きつけ、異論の実践を要求するという方向をとった。一方、ホンマ論文は白人にたいして、不可視、無標、中立、普遍、非意図とされるホワイトネスを批判的に認識することが図書館情報学や図書館サービスの展開にとって不可欠であ

ると訴えている。主流への要求よりも、主流そのものに切り込んでいるという点がホンマ論文の大きな特徴である。ホンマは変容のための図書館情報学や変容のための図書館を求めているし、それが必要な理由も述べている。しかし筆者には必要な理由は理解できるし、それを図書館史研究の着想に結びつけるのは可能だが、どのように図書館史記述に実質化していくかということになると、かなり手ごわい取り組みになると思われる。ホンマ論文の是非はともかく、ホワイトネスを意識しなければ非ホワイトへの図書館サービスは決して成功しないという指摘は納得できるものであり、この点で本論文は重要な示唆を与えている。

ごく最近になってウィーガンは『人種隔離の南部公立図書館における人種隔離撤廃：公民権と地方での積極的活動主義』(Wayne A. Wiegand and Shirley A. Wiegand, *The Desegregation of Public Libraries in the Jim Crow South*, Louisiana State University, 2018) を刊行した。ウィーガンは同書の末尾でホンマ論文に触れ (p.204)、ホンマの視座がこれまでの図書館研究では欠落しているとともに、そうした視座の重要性を指摘している。ホンマ論文の視座を、例えばどのように図書館史研究に具体的に組み込んでいくかについては今後の課題になるだろう。

なおホンマ論文を当初は関連図書館学方法論研究会が編集し松籟社が発行するシリーズ「図書館・文化・社会」の第2巻(2019年4月発行予定)に掲載する予定であった。原著論文はカリフォルニア大学ロサンゼルス校のオープンアクセスの学術雑誌に掲載されていた。著作権の許諾を求めてホンマに連絡をすると、市販の単行書ではなくオープンアクセスの学術雑誌に掲載し、だれもが無料で入手できるようにしてほしいということであった。そうしたホンマの希望を受け入れ、『同志社図書館情報学』に掲載していただくことにした。原田隆史・佐藤翔の両先生に感謝したい。

(かわさき よしたか。

ふくい ゆうすけ。

2018年8月9日受理)